資料館ノート　第38号　　平成14年3月16日発行

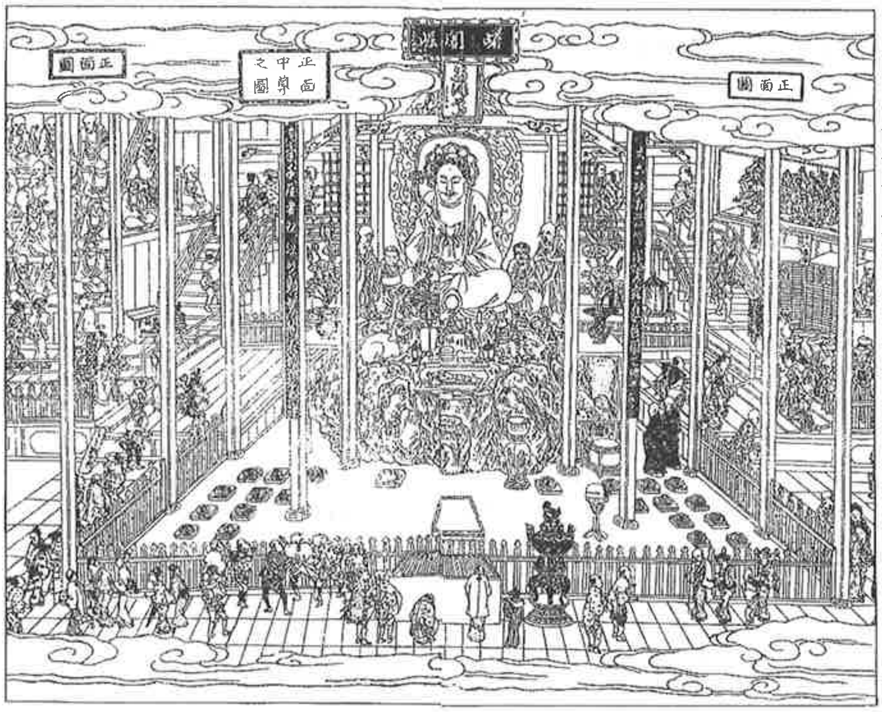
明治通りから中川口

江東区深川江戸資料館

第33号（平成13年5月号）から小名木川沿岸の歴史や史跡を紹介してきたこのシリーズも、最終回を迎えました。

明治通りから小名木川東端の中川付近までたどってみましょう。

五百羅漢寺（ごひゃくらかんじ）



五百羅漢寺（江戸名所図会）

明治通りと新大橋通りの交差点（新宿線西大島駅前）に、羅漢寺（大島3－1）という寺があります。この羅漢寺は、もとは西多摩郡氷川村にあり祥安寺といいましたが、この地に移ってから、羅漢寺と寺号を改めました。

これは、かつてここにあった大寺院・五百羅漢寺にちなむものです。

五百羅漢寺は、黄檗宗（おうばくしゅう）で元禄8年（1695）松雲禅師によって、この地に創建されました。京都の仏師だった禅師は、寛文9年（1669）に出家して貞享年間（1684～87）に江戸へ下り、元禄4年（1691）から羅漢像を彫り始めたといいます。

5代将軍徳川綱吉の帰依を受けて、天恩山五百阿羅漢寺の号と、六千坪余の境内地を賜り、自ら彫刻した536体の羅漢像を安置しました。羅漢像が安置された本堂（羅漢堂）は、東西に翼のようにのびる回廊が設けられた大規模な建物でした。

境内西方には三匝堂（さんそうどう）という3階建ての堂がありました。廊下がらせん状に屋上まで続き、百観音が安置されており、建物の形状から「さざえ堂」ともいわれました。羅漢堂も三匝堂も堂内に無数ともいえる「ほとけ様」が置かれ、見物人はその荘厳さに圧倒され、感動したことでしょう。

境内は、現在の羅漢寺北方から南は総合区民センターまでが含まれ、西は明治通り、東は城東保健所付近までが入ります。

羅漢寺が創建された元禄8年当時といえば、周辺には小名木川・竪川・横十間川といった掘割がすでに開かれて、元禄6年（1693）に新大橋が架けられ、同11年には永代橋が架けられました。

西方の深川地域では土地と掘割の整備による流通の拠点としての都市機能が拡充し、江戸市中との結びつきを深めていました。その東方に成立した江戸の近郊農村だった大島地域も、小名木川沿岸には町場ができ、江戸から訪れる人も増加しました。

羅漢寺はこうしたなかで誕生した、江戸の新名所でした。

精製糖工業発祥の地

進開橋と丸八橋の間、その南岸にある北砂5丁目団地周辺は、日本ではじめて精製糖（白砂糖）の製造が行なわれたところです。

開発者の鈴木藤三郎は安政2年（1855）遠江国（静岡県）周知郡森村で生まれました。明治11年（1878）頃から精製糖の研究をはじめ、同21年（1888）に上京、当時の南葛飾郡砂村に鈴木製糖所をおこし、努力の末同23年に精製糖の製造に成功し、その5年後には日本精製糖株式会社を設立しました。

当時の北砂周辺は農村地帯。田畑が広がる中に大きな工場が作られて、大いに関心を集めました。

芭蕉の女木塚

丸八橋際にある大島稲荷神社（大島５－39）に女木塚の碑があります。碑の上部に「女木塚」と大書され、松尾芭蕉の句「秋に添て　行はや末ハ　小松川」と刻まれています。この碑はもと愛宕神社にありましたが、第二大島中学校（今の大島中央小学校）に移され、のち同社に移されました。

この句は芭蕉が50歳の時、元禄５年（1692）に詠んだ作品です。秋の１日深川芭蕉庵から、船に乗り小名木川を中川方面へと訪れたのでしょう。

松平冠山屋敷跡

明治に白砂糖が作られた小名木川南岸付近は、江戸時代には大名・旗本の屋敷が集まっていました。常陸（茨城県）笠間藩牧野家下屋敷・三河（愛知県）　吉田藩松平家下屋敷・阿波（徳島県）徳島藩蜂須賀家抱屋敷・因幡（鳥取県）若桜藩池田家下屋敷などが立ち並んでいました。

若桜藩は鳥取藩の支藩で、二万石の小藩でした。その藩主に池田（松平）定常という人がいました。明和４年（1767）に生まれた定常は、天明５年（1785）19歳で家督を継ぎました。若い頃から佐藤一斎について儒学を学び、「学者大名」として知られました。

江戸の黄檗宗寺院について調査・研究した「江戸黄檗禅刹記」、浅草寺の由緒・歴史についてまとめた「浅草寺誌」などの著書を残しました。

宝塔寺の塩なめ地蔵

北岸の大島８丁目に真言宗の宝塔寺があります。江戸初期の慶長15年（1610）、小名木川開削から間もない時期の創建と伝えられています。

その広い境内に塩なめ地蔵という地蔵が、小堂の中に安置されています。この地蔵は小名木川沿岸に立っていましたが、昭和初期に門前に移されました。

別名いぼ取地蔵とも言われ、小名木川を利用する人々が商売繁盛を願い、さらにいぼを取ってもらおうとする人がお参りして塩を供えました。昭和初期の頃までは縁日も開かれたほどのにぎわいを見せました。おそらく参詣には小名木川が利用されたことでしょう。

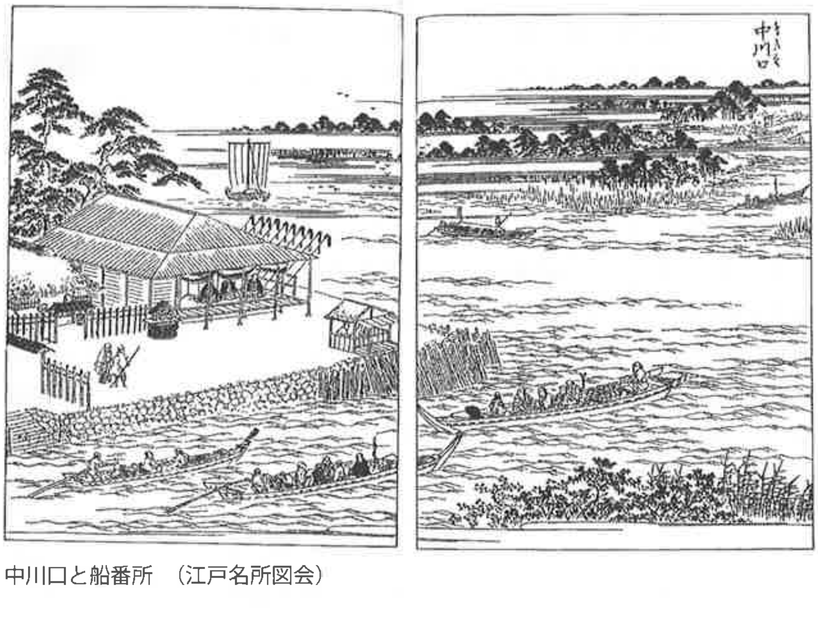
同じ大島８丁目にある子安児童遊園には正徳２年（1712）在銘の庚申塔が残されています。この公園には、かつて子安稲荷神社がありました。周辺は平方村といい、江戸初期に摂津の枚方（平方）の人によって開拓された村とされ、その鎮守がこの子安稲荷でした。この庚申塔にも庚申講を構成する７名の村人の名前に加えて「平方村中」と刻まれています。江戸中期、平方村には庚申講が行なわれるほどの村人相互の結びつきがすでにあったことを伝えています。

中川船番所跡

小名木川の東端に架かる橋を番所橋といいます。江戸時代、大島９丁目の小名木川河口に中川船番所がありました。

小名木川は奥川筋といわれる、東北・関東各地と江戸を結ぶ動脈でした。その江戸への入り口で、人と物資の取り締まりや検査のために置かれたのが中川船番所です。番所の奉行には五千石以上の大身の旗本が就任しました。

この番所は当初小名木川西端の隅田川への注ぎ口、隅田川口にありましたが、明暦の大火後に本所深川の開発が本格化する寛文元年（1661）に東端の中川口へと移りました。以後江東地域は小名木川に加えて大横川・横十間川・竪川・仙台堀をはじめとする大小の掘割が縦横に開かれ、「蔵の町」としての地域的特色が生まれました。



中川口と船番所　（江戸名所図会）